

AXL公認会計士講座

平成20年度 公認会計士短答式試験 解答速報

科目	問題	正解	問題	正解
財務会計論	問題1	5	問題17	4
	問題2	2	問題18	3
	問題3	3	問題19	1
	問題4	4	問題20	4
	問題5	3	問題21	4
	問題6	1	問題22	5
	問題7	4	問題23	3
	問題8	2	問題24	1
	問題9	5	問題25	2
	問題10	5	問題26	5
	問題11	1	問題27	4
	問題12	5	問題28	2
	問題13	3	問題29	4
	問題14	3	問題30	検討中
	問題15	2	問題31	5
	問題16	2	問題32	5

問題30

B商品について「決算手続中に、200個につき買取の意思表示があった」とあるが、決算手続中は決算日の翌日以後であるので、当該600千円は当期の売上原価に計上すべきでない。そうすると売上原価は16,650千円となるが、選択肢にないため困惑している。

※解答速報はAXL独自の見解に基づき、作成したもので本試験の公式結果ではありません。
また、内容につきましては変更する場合がございますので、予めご了承ください。

平成 20 年度 公認会計士短答式試験「財務会計（財務諸表論）」講評

1. 全体講評

昨年までと異なり、問題数は40問から32問になり、うち財務諸表論は11問であった。配点は財務諸表論が1問あたり7点、合計77点であった。

問題の構成は、財務諸表論と簿記が交互に続き、最後の方に簿記の総合問題もあったため、財務諸表論と簿記にどれだけの時間を割り当てればよいのかという「時間配分」が難しかったと思われる。この結果、問題の難易度やボリュームを見分けて取捨選択、つまりどの問題を確実に解くか、捨て問はどれかなどを見極めて、「攻めるか」もしくは「守るか」といった戦略を試験開始3分くらいまでの間に決めることに苦労した方が多かったろうと思われる。

2. 戦略とメンタル

受講生の中には、次のような戦術とメンタルを持てた方もいただろう。今年の本試験では理想的と言っ

てよいが、論文式でも大いに参考になると思われる。

企業法、監査論および管理会計論は前年度より容易だ(この3科目である程度貯金ができている)。公認会計士審査会の趣旨に従って、「基本的な知識を幅広く」問う良問だ。いわゆる「受からせる試験だ」。しかし、財務会計論は、それまでの科目と一転して難しく、細かく、解きづらい。審査会の趣旨である「基本的な問題を幅広く」でなく「基本的でない問題を幅広く」であり、「受からせる試験」でなく「落とす試験だ」。

本試験には必ず「魔物が棲んでいる」といわれるが、「今年の魔物は財務会計論」ということだろう。ならば、それまでに獲得した貯金も考えれば、財務会計論(特に記述問題)は4割の問題を手堅く解き、残りは消去方式などを駆使して、正解可能性を少しでも高める戦術をとろう。難しい問題でも正解可能性を(5分の1の20%でなく)40%~60%ぐらいに高めることができれば、正解可能性の高い問題で約40%、正解可能性が中程度の問題は消去方式を用いて約15~20%を獲得しよう。そして、捨て問でも、5分の1の確率で得点できるはずだ。つまり今年に限れば、財務会計論は「ガチガチに守る」のが正解であろう。全ての問題に手をつけ、あたふたしてしまうことによるケアレスミスが一番怖い。

このように、今年の財務会計論はメンタル勝負だったように思われる。

3. 個々の問題の感想

難易度(正解可能性):「易」=70%超、「中」=70~50程度、「難」=50%未満

問題	難易度	論点	コメント
1	中	概念フレームワーク	普通に考えればウとオが正解だが、問題文は「正しいものを一つ選べ」である。どちらがより正しそうか、間違っていそうかを考えるしかない。 オは前半・後半ともにこれといった誤りは見あたらない。ウは、持分法が投資会社と被投資会社との間に一体性が見られる場合にリスクから解放されるため、通常の場合なら関連会社に持分法を適用すべきである。しかし、一体性が存在する場合に持分法が妥当するだけであるから、関連会社でも他に支配株主が存在する場合のように一体に欠け、持分法が適切でない場合もある。このようにロジックで考えると、相対的にウの方が誤りとなる。

			<p>概念フレームワークというアクセルにとって最も「おいしい」はずの料理だが、毒が盛られていた感じがする。</p> <p>正解可能性は 60%程度か？</p>
3	難	伝統論(財務会計の基礎概念)	<p>審査会の出題趣旨に反する問題である。伝統論だが、問題10のような基本論点でなく、学說的(一橋学派?)な論点も含んだ応用問題である。捨て問とすべきで、これにこだわるとメンタルに悪影響を与える虞がある。</p> <p>オは明らかに×。アは企業実体の公準は会計主体論を含むとみるかどうか2つの見解があるため、それを考慮して消去方式で解くしかない。ウは通常の動態論の考えだから○。そうするとウを含む選択肢は、2.イウと3.ウエの2つだから、イとエの勝負になる。今の受験生で、イの論点を知っている人はまずいないと思われるが、エは静態論と割り切って考えれば○とすることは一応可能である。</p> <p>正解可能性は 30%~40%程度か？</p>
5	中	棚卸資産の評価	<p>アが一致すること、イが一致しないこと、オが一致することは比較的容易であろう。ウとエは難しいが、消去方式で考えると、イが明らかに一致するから、選択肢のうち、1.アイと3.イエ2つが選ばれる。ここでアは明らかに一致することから、エが一致しないと推定できれば解ける。</p> <p>正解可能性は 60%~70%程度か？</p>
6	易	固定資産	<p>アイウは基本的。エオは応用ないし細かい論点。しかし、アとウは明らかに○であり、選択肢に1.アウがある以上、解けて欲しい。合否を左右する問題である。</p> <p>正解可能性は 70%~80%程度か？</p>
9	中	繰延資産と引当金	<p>イウエは基本的。アとオで悩んだ人が多そうだが、オは(少し細かいけれど)基準に規定があるから○。一方、アは、旧商法と違い、会社法は法令が会計の邪魔をしないのが基本的考えということに気付けば×とすることができる。合否を左右する問題である。</p> <p>正解可能性は 60%程度か？</p>
10	易	伝統論(実現主義)	<p>ア~エは基本的。オは応用問題なので難しい。しかし、エが明らかに×であり、ウは明らかに○なので、4.ウエと5.エオなら、5.エオを選ぶことは可能であろう。合否を左右する問題である。</p> <p>正解可能性は 80%程度か？</p>
11	難	注記	<p>捨て問である。イだけが基本的。残りは細かく、「基本的な問題」を幅広くという審査会の趣旨に明らかに反する問題。ただ、アは、常識的に考えれば○の可能性が高い。ウは、会計方針の注記について原則的な会計方針を採用している場合には省略が認められる、という基本原則に気付いたならば○とすることは可能だろうが、その基本原則を知らない人にとっては難しい問題である。また、ある程度勉強した人は、「基準や指針にオのようなことが書いてあった気がする。」と思い出し、オも正しいと考えるであろうから、1.アウと2.アオで悩むだろう。解けなくとも気にしてはいけない問題である。</p> <p>正解可能性は 30%程度か？</p>
17	難	退職給付	<p>全体的に細かな問題である。イとウがそれでも基本的だが、ア、エ、オは細かい。消去方式で解くと、ウが多分正しいと考え</p>

			て、4.ウエと 5.ウオの勝負に持ち込めれば満足すべき問題である。しかし、そこまで持ち込んでも 2 分の 1 の確率しか正解可能性はない。またもや捨て問である。 この結果、正解可能性は 30%～40%程度か？
19	易	税効果	簿記と財務諸表論の両方の知識を活用すれば、基本的な問題である。財務諸表的には、ウエオは明らかに○。 正解可能性は 80%程度か？
21	易	連結	イを除き基本的な問題である。アエは基本問題。イはみなし売却と実際の売却の違いに気付けば特に問題はないであろう。オは簿記的に考えてもロジックで考えても明らかに○であるが、本問はこれを○とできるかが勝負である。ウは細かいが、イとエが明らかに誤りだから 4.イエを選択することは難しくないと思われる。合否を左右する問題である。 正解可能性は 70%程度か？
22	中	企業結合と事業分離	アイエは基本的だが、ウとオは細かい。消去方式で解くべき問題であろう。エが○だから、4.ウエと 5.エオの勝負になる。ウもオも細かいため確率 2 分の 1 になった方も多いと思われるが、ウについては冷静にロジックで考えることができれば、連結上時価評価は適切でないと考えられる。なお、そこまで考え付かなくても(つまりこの問題ができなくとも)合格可能性はあるが、このようなことに気が付いた人は合格し易い傾向にある。見ようによっては、本問は知識問題でなく、思考力問題である。 正解可能性は 60%程度か？

4. ボーダーラインの予測

11 問中、正解可能性が 70%超の問題が 4 問、70%～50%の問題が 4 問、50%未満が 3 問である。感覚的にはボーダーラインは次のように 6 問くらいと思われる。

<ケース1> 正解可能性が 70%超の問題が 4 問正解、70%～50%の問題が 2 問正解、50%未満の問題は全滅。

<ケース2> 正解可能性が 70%超の問題が 3 問正解、70%～50%の問題が 2 問正解、50%未満の問題が 1 問正解。

5. 講師の独り言

良くない問題と思う。費用対効果が悪い。きちんと勉強しても、少し手を抜いてもあまり得点に差が生じない問題であろう。合否が運に左右されるタイプの問題であった。

公認会計士審査会では、短答式は「基本的な問題を幅広く」といい、実際、企業法、監査論、管理会計論はその趣旨に則った問題であったといえる。しかし、財務会計論は、このような趣旨とかけ離れていると言わざるをえない。

今年の論文式や来年の短答式では、審査会の趣旨に即した問題が出題されることを強く望む。

6. 論文式との関連

論文式を受験される方に追記すべきことがあります。それは短答式の問題の問題1(概念フレームワーク)と問題3(動態論)の出題者が多分同じであること、そしてその方の学会における位置付けや師弟関係(特に師匠)などを考えると、今年の論文式の問題を作成する可能性があること、その結果、同じ概念フレームワークを出題するにしても、切り口が特殊であるため、事前に対策(試験委員対策)をしておか

ないと「好ましくない状況」に陥る可能性があることです。

この点については現在調査中ですが、近日、アクセルのHPで続きを報告するつもりです。なお、来週火曜日に行われる論文直前講義ではこの点について触れますので、是非、受講されることを希望します。

2008年5月30日現在
AXL 公認会計士講座